



ふくりゅう

特定非営利活動法人
日本下水文化研究会会報

発行責任者 酒井彰(運営委員会代表)

平成14年7月10日
通巻27号

バルトン忌 2002は浅草十二階の講演、バグパイプ演奏など

今年も「バルトン忌」が近づいてきました。会員の皆様にとって「バルトン忌」という語は、完全に夏の「季語」となっているのではないのでしょうか？

今年は8月3日(土)に行くことになりました。

本年は、下記のとおり、青山墓地のバルトン墓前での行事(昨年お願いした佐々木ゆかりさんが墓前でバグパイプを演奏して下さいます)の後、会場を神田・学士会館に移し、滋賀県立大学細馬宏通氏による講演「浅草十二階とバルトンのいた明治」と懇親会を予定しています。

週末の午後、バグパイプ演奏を聞きながらバルトンの故郷スコットランドに、さらに講演を聞きながらバルトンが壮年期を過ごした明治期の日本に思いを馳せませんか？墓参のみ、講演のみの参加も歓迎します。

記

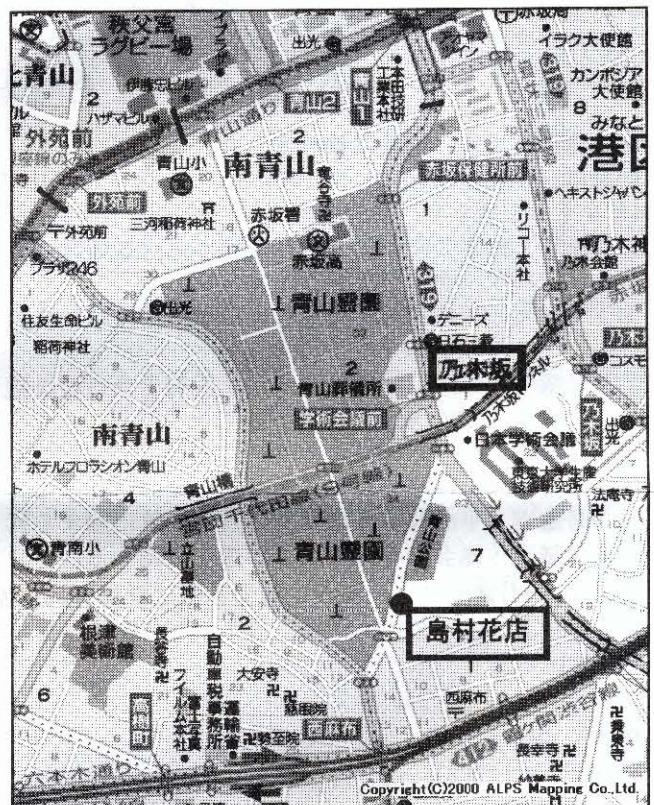
1. 日時 8月3日(土曜日) 12:00~16:00
2. 墓参集合時間と場所 12:00
青山墓地・島村花店(地図参照)
3. 行事予定
12:00~13:00 青山墓地・バルトン墓参
(バグパイプ演奏:佐々木ゆかりさん)
13:00~13:40 神田・学士会館へ移動
神田・学士会館2階(千代田区神田錦町3-28)
TEL: 03-3292-5936
※講演からご参加の方は、直接講演会場へお越しください。
13:50~14:50
講演「浅草十二階とバルトンのいた明治」
滋賀県立大学・細馬宏通氏
15:00~16:00 懇親会(参加費2000円)
※会参加ご希望の方は、7月25日ぐらいまでに事務所宛 FAX等でお知らせ願います。

【講演要旨】バルトンの設計した十二階は、単に高い建物であるだけでなく、エレベーターを備え、さまざまな催し物を行った擬似博覧会場でもありました。鳴り物入りで喧伝されたエレベーターが撤収されるまでの顛末や、エレベーター撤収後に行われた美人コンテストや絵画、写真、ジオラマ展示会、そしてそれらが巻き起こした風聞について、私蔵の絵はがき、錦絵をお見せしながら、バルトンが在日した明治二十年代から明治三十年代までの十二階についてお話しいたします。また、バルトンのかかわったさまざまな写真家コネクションが十二階設立にはたした役割についても触れられるそうです。

細馬さんは、十二階に関するホームページを立ち上げておられます。十二階についての資料もかなり集まってきて

いるようです。一度ご覧いただければと思います。
(<http://www.12kai.com/>)

【講演者プロフィール】細馬宏通(ほそまひろみち)氏 1960年生。1992年京都大学大学院理学研究科博士課程修了(動物学)。現在、滋賀県立大学人間文化学部講師(コミュニケーション論)。主な著訳書:細馬宏通『浅草十二階・塔の眺めと〈近代〉のまなざし』青土社、2001年、細馬宏通+吉村信『ステレオ・感覚のメディア史』ペヨトル工房、1994年、バイロン・リーブス+クリフォード・ナス『人はなぜコンピュータを人間として扱うかー「メディアの等式」の心理学』細馬宏通訳、翔泳社、2001年。



集合場所

島村花店(待合室があります。)
住所 港区青山2-34-31
TEL 03-3401-2682
その他当日緊急のご連絡は
090-9150-3922(酒井・携帯)まで

2002年度日本下水文化研究会総会報告

去る5月25日(上)の10:00から12:00まで、学士会館本郷分館を会場として、第6回総会が開催されました。

まず、西堀清六・代表評議員の挨拶の後、『21世紀の水道・下水道の課題』と題して、中西弘・山口大学名誉教授による記念講演が行われました。

西堀代表評議員からは、全国に下水道に携わる人は10万人をはるかに越えているはずなのに、それに比べて本会の会員数はいかにも少なく、これから会員拡充に努めることを強く要望されました。

中西先生の記念講演『21世紀の水道・下水道の課題』では、新しい水道・下水道は、「水を汚さないこと」を基調として構成するべきであり、そのためには、水洗文化・文明の見直しからスタートしなければならないことを指摘されました。さらに、「いたわりの下水道」をネーミングされ、「下水道を必要としない社会づくりへの努力」、「働かなくても良い社会へ」とまで言い切られました。大量に水資源を汚し、そして大量に処理場に受入れて処理するという、これまでの先進国の常識に警鐘をならされているのです。水道と下水道を新しい視点からとらえた斬新な内容でした。会場には、30余名の会員が聴講させていただきましたが、我々だけではもったいなく、まさに全国に、そしてとくに若い人に発信したい講演でした。

記念講演終了後、総会に移りました。

総会は、正会員281名中、出席者32名、委任状提出者134名をもって成立し、議長として運営委員・稲場紀久雄氏を選任し、議事に移りました。審議された議案は以下のとおりであり、すべて承認されました。

第1号議案：平成13年度事業報告の承認ならびに会員の現況報告に関する件

第2号議案：平成13年度収入支出状況報告及び会計監査の承認に関する件

第3号議案：財産目録承認の件

第4号議案：役員選任の件

第5号議案：平成14年度事業計画及び予算に関する件

第6号議案：総会議事録署名人の選任に関する件

その後、4号議案により新たに運営委員に就任された佐藤八雷氏および椿本祐弘氏の自己紹介および就任にあたっての挨拶があり、全ての議案審議を終了しました。

以下は両氏の当日の挨拶及び所信の表明です。

(椿本) 20世紀は「石油の世紀」であったのに対して、21世紀は「水の世紀」だと言われます。21世紀における諸課題の中でも最大のものの一つである「水」問題について、「下水文化研究」という側面から参画出来ることを非常にありがたく感じています。今後ともよろしくお願い申し上げます。

(佐藤) 1992年の創立以来の、「日本下水文化研究会」の会員です。創立記念集会から参加し、下水とか、し尿とか、世でいうところの不浄のものにも文化があるというところに、惹かれました。「下水文化研究」、「下水文化研究

発表会講演集」の内容は、従来の「日本下水道協会誌」や「月刊下水道」とは違った意味で、下水に携わる私の興味を惹く記事が満載されております。

当研究会が設立されて後、今日まで、ちょうど10年になりますが、まだ年間予算はわずかに600余万円にすぎません。これはあまりにも少な過ぎます。しかしながら、活動内容にはユニークなもの、誇るべきものが十分にある、というのがこれまでの私の感想です。

これまでの30有余年、下水とし尿と排水で、我が社も、社員もご飯を食べることが出来ました。このことのご恩返しの意味で、これから少しでもお役に立ちたいと願っています。

就任にあたって、目標を二つ立てました。ひとつは、西堀代表評議員のお話にもありましたように、会員数をもっともっと増やしたいと思っています。現在の正会員(個人会員)281人と賛助会員(法人会員)38社というのは、やはり寂しすぎます。下水道事業に携わっている自治体職員、コンサルタント業界、維持管理業関係者、メーカー、建設会社社員の総数は10万人をくだるまいと思われまます。我が研究会の内容とサービスの充実はむろんですが、より多くの人に会の活動の意義を解ってもらう必要があるのではないのでしょうか。

二つ目は、若いひとにより多く参加してもらえる定例研究会であり、下水文化講演会、下水文化活動にしたいものです。次代を担う若い下水文化探究者に多く参加してもらうことが、会を活性化させる良策であるに違いありません。そのためには若い人にとって、なにが魅力的なのかを、我々年輩者が知る必要があります。

当日は五月晴れの中、お隣の東京大学キャンパスでは「5月祭」が開催中でした。

(注)本記事は、新たに運営委員に就任された椿本、佐藤両氏に報告記事を執筆いただくとともに当日の挨拶を含めて所信を述べていただいたものです。



中西弘先生

秋の多摩川源流の祭典「水と森と食の祭典」のご案内

平成14年度事業計画に取り上げている「水と森と食の祭典」について、日程などが詰められつつありますので、これまでの経過と開催日時などをお知らせします。

この企画は、もともと昨年12月、本会の稲場運営委員、藤森監事が山梨県小菅村にある「多摩川源流研究所」の中村文明所長にもちかけたものです。多摩川源流の水源地は日本屈指の森に成長していますが、全国各地では森林の荒廃が進み、森林の保全と再生は源流域の産業振興、活性化に欠かせないこととなっています。さらに森林の持つ国土保全、健全な水循環など多面的な機能を再評価する必要性も広く認識されつつあります。このような共通認識のもと、平成15年3月に開催される「第3回世界水フォーラム」に際して、水と森の関わり的重要性と源流域の産業や文化を広く社会に訴えようということを稲場、藤森、中村の3名で確認しました。

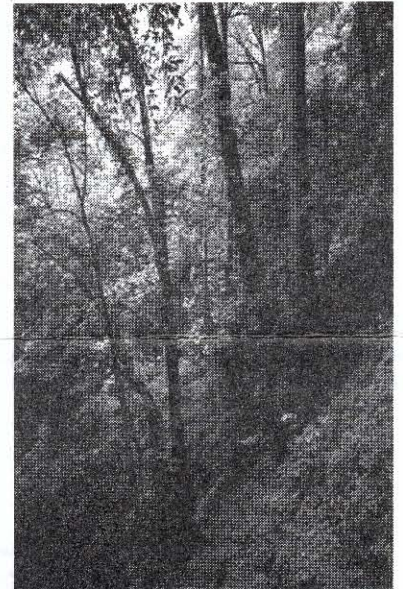
その後、「水と森と食の祭典」をどのように運営するのがふさわしいのかについて議論を進める一方、中村所長を中心に源流域の関係者間での協体制制に関して調整が進められた結果、多摩川源流域の4市町村（塩山・奥多摩・丹波山・小菅）で源流協議会が結成される運びとなったようです。「祭典」は、小菅村において過去2回「大地の恵みの祭」が開催されており、「小菅の湯」周辺を会場に多くの参加者を集めてきた実績があるので、「大地の恵みの祭」とタイアップして、「水と森と食の祭典」を実施していくことになるようです。

なお、今年は、山の御爺・中川金治翁が多摩川源流入りを果たして、ちょうど百年の節目に当たります。そこで、中川翁の山村の人々に向けられた暖かなまなざしをしのぶため、塩山と丹波山を中心とした地元有志の方々と相談しつつ、『中川金治翁をしのぶ会』の開催計画を進めています。このときには、丹波山村の竿裏峠にある中川神社を参拝する予定です。

さて、「水と森と食の祭典」の運営ですが、本会は小菅村、多摩川源流研究所とともに、主催団体となる「水

と森と食の祭典実行委員会」の呼びかけ団体ならびに祭典の協賛団体となります。実行委員会は、7月25日に開催の予定です。この実行委員会には、多摩川流域のNPO等団体、全国の源流ネットワークなどに広く呼びかけを行うことになっています。

正式な、日程、催しの内容等はその際に決まるものと思いますが、その後になると、この会報で会員の皆様にお伝えする時期を逸しかねません。そこで暫定的ですが、内容をご案内いたします。『水と森と食の祭典』に、ふるってご参加いただきますようお願い申し上げます。



記

- 主催 水と森と食の祭典実行委員会
 協賛 小菅村/多摩川源流研究所/日本下水文化研究会/ (財) 水と緑と大地の公社ほか
 協力 東京都水道局/国土交通省京浜工事事務所/塩山市/奥多摩町/丹波山村/小菅村観光協会/小菅村商工会/小菅村食生活改善推進委員会/世界水フォーラムほか
 期日 平成14年10月19日(土)～20日(日)
 内容 【19日】13:30～

会場：小菅村中央公民館

PART1 基調報告

山の御爺「中川金治」をたずねて
 ～多摩川の水源地を作った人々～

大阪経済大学教授 稲場紀久雄氏

PART2 基調講演 講演者交渉中

21世紀は水と森の世紀 (仮題)

PART3 シンポジウム (実行委員会メンバーからのメッセージなど)

【20日】10:00～15:00

会場：小菅の湯周辺広場・村営釣り場

内容(予定)：源流視察、郷土芸能の集い、食文化体験、特産品づくり体験、植樹、魚釣り



紅葉に色づく源流の山々 (モノクロですいません)

源流の森の写真は多摩川源流研究所のホームページより転載させていただきました。(http://www.cosmo.ne.jp/~genryu/)

【追悼】 広松伝氏の遺志を継ぐ！

運営委員 稲場紀久雄

5月16日のこと、ある新聞の夕刊を見て絶句した。広松さんの訃報が載っているではないか。わが目を疑った。信じられなかった。やがて、「巨星落つ」の思いがどっと込み上げて来た。日頭が熱くなった。

広松さんは、強くて優しい人だった。もう10年以上前になるだろうか。初めて柳川に広松さんを訪ねた。遠来の私のために仲間を集めて、歓迎の宴を催して下さいました。しかも、その翌朝は、多忙な時間をさいて自ら掘割を案内して下さいました。温かい陽射しの中を船に揺られて美しい景色を満喫したことが鮮やかに思い出される。広松さんは、危機にひんした柳川の掘割を再生させたあと、その生涯を市民の先頭に立って全国の水環境の蘇生に捧げられた。さらに子供達が楽しんで学べる環境教育にも心を砕かれた。最近是有明海の汚染を特に憂慮されていた。「会議に行かなければ・・・。」と言いつつ、広松さんの意識は遠のいて行ったと聞いている。

広松さん、私達もまた、広松さんのご遺志を継いでま

います。どうか見守っていて下さい。ご冥福を心からお祈りいたします。

[広松伝氏：全国水環境交流会代表幹事、重症急性すい炎で5月15日逝去、享年64歳]



柳川掘割

シリーズ 東京のし尿処理の変遷(3)

第2期 「各種衛生的な処理の探求・その2」

東京下水道史探訪会¹

新たなし尿処理を模索する

肥料としてのし尿の利用が大幅に減ったことから、東京市はし尿を処理するために、大正9年12月に1日200石を処理することの出来る硫酸アンモニア工場建設の予算を市会に提出したが、議論も多く成立を見なかった。大正10年10月市長後藤新平伯は本案を撤回した。

東京市は止むなく、後藤市長時代の1921年に臨時に浅草区内南元町、栄久町、松清町にし尿投棄所を設けた。住民の非難のなかで他の処理方法も無く、昭和6年に綾瀬処理場に移るまでの十年間以上も臨時のし尿投棄所の使用を続けざるを得なかった。

浅草区内のし尿投棄を始めて2年後、折悪しく、大正12年関東大震災が起こり、市内は焼け野原となった。市は清掃用具、運搬機材を失い、し尿処理は業者に緊急援助を頼んだ。東京生肥料KKや東京糞尿肥料組合の清掃業界もこれに即座に応じて一カ月10万円で二カ月の契約を結んだ。市民一日の排出量は7千石のうち業界は4千5百石を引き受けこの難を切り抜けた。関東大震災を契機に下水工事が急速に進み、また浄化槽装置に切り換える機運が高まった。

また、昭和5年汚物掃除法が一部改正され、糞尿の処理処分は市の義務とされたが当時市としては諸事の事情から昭和9年10月末までその義務を猶予されていた。昭和11年東京市は全し尿の処理を市の直営とする方針を決めた。この時からし尿処理は直営、請負、農民くみ取りの3本建てとなった。

東京市清掃課綾瀬作業所

現在の小菅処理場の場所に綾瀬作業所(し尿浄化処理場)が昭和8年に竣工した。

処理方式は促進汚泥法(活性汚泥法)で処理量は180t/日であった。戦後閉鎖されている。詳しい導入の経緯が不明だが、かなり早い時期の活性汚泥法が導入されている。

設備の概要は以下の通り。

「東京市葛飾区小菅町680番地、1,974坪、本作業所ハ市内ノ汲ミ取り便所ヨリ生ズルシ尿ヲ最新ノ下水処分法タル促進汚泥式ヲ基トシタル殊ノ設計ノ下ニ昭和6年7月工ヲ起コシ同8年3月31日竣工作業ヲ開始セリ。都市ノ下水ト異ナルシ尿ヲ希釈シテ促進汚泥式処分法ニヨリ浄化スルコトハ欧米ニ於イテハ未ダソノ例ナク本邦ニ於イテハ京都市十条処分場ニ負イ実績挙ゲルニ止マリ本作業所ニ於イテハサラニシ尿ヲ希釈シテ腐化溶解セシムル方法ヲ加味シ促進汚泥ニヨリ処分スルコトシテ斬新ナル設備ヲ施シ猶ホシ尿中ノ有機固形体ヲ分解スル行程ニ於イテ発生スル「めたん」瓦斯ヲ利用シテ前期ノ溶解及ビ分解作用ヲ促進セシムル装置ニシテ本邦ニ於ケル全ク新シイ設備ヲナセリ本作業所ハ左ノ重ナル設備ヨリ成ル。

(1)し尿区汲ミ上げ場、(2)レシービングタンク、(3)バイオリスタンク、(4)希釈水混合室、(5)曝気槽、(6)最後沈殿槽、(7)消毒槽、(8)残渣乾燥場、(9)事務所兼機械室、(10)めたん瓦斯口過器、(11)めたん瓦斯貯留槽、(12)めたん瓦斯

利用ボイラー室」

(綾瀬清掃作業所については、下水文化研究第12号に詳しい。)

海洋投棄への道

し尿の海洋投棄は投棄法に基づいたものではあるが、昭和7年頃からやむを得ない処置として始められた。昭和11年全し尿を市直営としたが結果、貯留槽だけではし尿の処理が不十分となり海洋投棄への比重が多くなった。農村くみ取り制度も行われて、し尿は農村還元が土壌育成のため必要なものとされたものが、化学肥料により農村の需要減で海洋投棄が方向付けられたものである。

東京市のし尿船

「し尿運搬に鉄船が浮かぶの聲に維持の人達は驚異の瞳を見張ったものだった。其は昭和10年の出来事である。この鉄船の工夫設計は東京市設計課の太滝円海等技術職員によるもので、海軍の輸送船にヒントを得たものだった。」(「清掃物語」より)

最初の武蔵野丸(1800石積)の造船は大阪の名取造船所で総工費23万円である。第二の市し尿船もまた鉄船で優清丸(3000石積)で清水港金刺造船所の建造による。

海洋投棄を始めてしばらくすると問題が生じた。当時の資料によれば、蛤やアサリのとれる時期になると、東京湾の沿岸都市からは多数の赤痢患者が発生したというのである。貝は大腸菌ではなはだしく汚染され、神奈川県寄りの東京湾は魚が寄りつかず、千葉県側の海苔の養殖地「そだ」の被害は大きかったという。汚染の様子を示す話として、千葉県側の砂浜は蛆が打ち上げられ白く見えることさえ有ったということである。

湾内の海洋投棄は禁止しなければならなくなった。調査の結果、剣崎と野島崎を結ぶ線の外側、相模湾は沿岸から1万メートル以遠とする事とし、各方面の了解を得た。昭和31年7月1日から実施の運びとなったが、小型船で投棄していた民間業者は新造船もできず、最後まで強く反対したという。

このようにしてし尿を外洋投棄に移行させることが出来た訳である。この「湾対策」事業で糞尿の陸上処理を目標としたために下水道とし尿処理施設の事業は飛躍的に伸びた。

浦安に浸透式し尿投棄所設置案と顛末

東京市はし尿処理に困り、様々な処理を試みようとしていた。その事を示す逸話がある。

浦安に「浸透式し尿投棄所設置」をしようとした事がある。浸透式し尿投棄所とはし尿を砂浜に投棄し、浸透させる方式である。いくら投棄してもし尿の水位は定量に保たれ、永久にし尿投棄が出来るという無限の能力を持ったし尿の終末処分場のことをいうというのである。

「清掃物語」からこの事を語る話を引用する。

「東京市の機構のうち保健、社会を合わせて厚生局と

なるに及んで局長は清掃部長から進んだ安井大吉氏、その後任は監査部から石森勲夫氏が転じた。頃は昭和16年晩春であった。局長は前任の経験を生かして市のし尿処理についていると頭をひねり新しい計画つまり恒久的な施設を持ってする解決策を案じた。それにはまず権威を網羅しその知能の助けによるのが早道だということ、農芸化学の重鎮鈴木梅太郎博士を始め東大農学部、医師会、伝研、北里の各研究所等の権威を顔ぶれとする委員会を作った。そしてし尿に関する諸種の問題についての審議を重ねられた。その結果は外国でも盛んにもてはやされている浸透式し尿投棄所設置案となった。この答申に基づき俄に計画区域を市街に物色、調査吏員を八方に走らせた挙げ句、千葉県浦安海岸東南寄り、松影はみどりに遠方開け、四方に築堤さえある、ぼら養魚場1万坪の砂浜に是が標的をあてた。

この区域一帯には東京市民の排泄し尿の2、3か月分を優に溜め込んでも砂地は其を呑み込み消化し些かも満腹するものではなく、しかもし尿のうち千葉か東京に日々入り込む多人数の排泄物もあって自然にその還元となるという理想そっくりの場所である。(当時は農会を通じ木更津方面にし尿売り払いをやっていた)まさにこの所こそ願ったり叶ったりの場所である。この計画は直ちに、小原市財務局長、岡安地理課長(後の副知事)等の实地踏査となり続いて市会の委員会にはかり承認決定となった。

ところが是を聞き知った市民は東京市当局の懇願と厚意を曲解し忽ち市当局の計画に正面きってケチをつけた。多少の理屈はあれ東京市のし尿を浦安に持ってくるのはもっての外だ。況して一度台風その他で高波奔騰すれば投棄所のし尿は海水と一緒に真っ向から浦安の住民全部が是を引っ被るには必定実に浦安は一瞬その洪水にし尿の街と化すであろう。かかる危険は真っ平御免とドラ声を張り上げて鐘太鼓を叩き、反旗を翻して、阻止の大猛反対運動を巻き起こした。是に折からの国会議員選挙も絡みついて県下を挙げての政治問題化し浦安は怒濤渦巻きあれに荒れる場面を展開した。」(「清掃物語」より)

この結果、この浸透式し尿投棄所を浦安に設置する案は無くなった。(続く)

「本稿は東京都下水道局文化会機関紙「水声」に掲載した記事に加筆したものです。(地田修一、小松建司、石井明男)なお、参考文献は最終回に掲載します。

し尿研究会・今後の予定をお知らせします。

(敬称略)

2002年10月4日 鈴木清志

「世界のトイレを旅する」

会場：ボランティアセンター

12月か1月 中村隆一「大正・昭和初期のし尿事情」

2003年3月 栗田 彰「し尿と落語・川柳」

6月 小松健司「法制史」

9月 平田純一「水洗トイレの開発」

日本下水道文化研究会・尿尿分科会編

「トイレと尿尿のはなし」(仮題)

が刊行されることになりました。今までの分科会し尿研究会で発表された内容を中心に「はなしシリーズ」で一話完結。33話程度、新書版で200頁程度。技報堂出版刊、平成15年5月刊行予定。お楽しみに!

プロローグ

(1) 尿尿の処理処分の変遷

間書き

(2) 尿尿汲取り業の創業と展開(高杉氏談), (3) 尿尿収集の機械化(工藤氏談) (4) 南千住取扱所(佐野、鈴木(和)氏談), (5) 尿尿の海洋投棄(佐野、鈴木(和)氏談), (6) 尿尿の鉄道輸送(佐野氏談), (7) 尿尿の嫌気性消化処理, (8) 消化汚泥のコンポスト化(内藤氏談)

尿尿事情

(9) トイレ汲取りの実態・仙台市の例, (10) 汲取りの実態・京都の例, (11) 大正末・昭和初年の尿尿事情

言語学的、古文書解説

(12) トイレ異名, (13) 農学書(「十字号糞培例」)の現代語訳, (14) 都繁昌記の現代語訳

様々な側面からみる

(15) 考古学からみた, (16) 古代のトイレ(「糞尿史」より), (17) 郷土史資料にみる下肥の流通と肥船, (18) 法制史からみた下水道との兼ね合い, (19) 文芸作品にみる尿尿に関する文章表現, (20) 江戸川柳に詠まれている便所と尿尿, (21) 落語から便所と尿尿の噺を拾う, (22) 絵画・漫画・写真にみる, (23) トイレレットペーパーと下水

処理・処分技術

(24) 尿尿処理技術の開発史, (25) 東京市綾瀬作業所概要, (26) 海浜への浸透処分(「狂乱 浦安の舞」より)

人体機能の面

(27) 糞便の排泄機能, (28) 尿尿と環境ホルモン

世界の状況

(29) 世界のトイレ事情, (30) インドネシアの尿尿処分, (31) 欧米の水洗化以前の尿尿処分, (32) 水洗トイレの開発, (33) 地方都市の尿尿対策

執筆者: 地田修一, 石井明男, 鈴木和雄, 佐藤昭典, 山崎達雄, 中村隆一, 森田英樹, 小松建司, 栗田彰, 関野勉, 河村清史, 田中宏明, 鈴木清史, 平田純一, 菅家啓一ほか

会費納入のお願い: すでにお願ひしておりますが、平成14年度会費早々に多くの会員の方から納入いただいております(7月5日現在で正会員221名、賛助会員33団体)。納入がまだの方は、早期の納入よろしくお願ひいたします。本会の事業は皆様からの会費で実施することができます。

お詫び: ふくりゅう26号で本会副代表・木村さんの寄稿のタイトルが文字化けしておりました。正しくは「シルクロード水紀行」です。執筆者にはご迷惑をおかけしたことをお詫び申し上げますとともに訂正させていただきます。

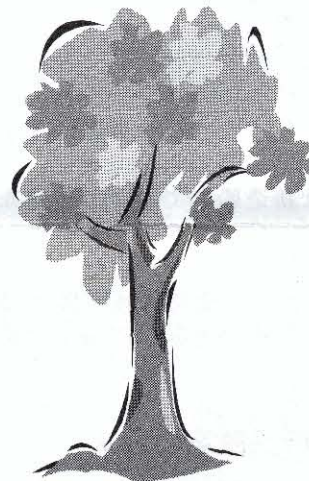
会員名簿を送付しました。: この会報に同封して会員名簿をお届けしました。7月5日までの会費納入時にいただいた異動等の情報は反映しております。会員相互の連絡等にご活用いただけたら幸いです。

無洗米情報: 前号で無洗米について寄稿いただいた小澤さんからお礼と無洗米に関するいろいろな情報源をいただきました。

①国民生活センター「無洗米の品質・安全衛生・環境性等を調べる*」②雑誌AERA臨時増刊号「安全が食べたい」の覆面座談会で無洗米の蒸蒸処理の問題が取り上げられたようです。③総務省公害等調整委員会広報誌『ちょうせい』第29号(今年5月)で富山和子さんが小澤さんの活躍を取り上げています。

* http://www.kokusen.go.jp/pdf/n-20020606_1.pdf

編集後記: 先日久しぶりに下水道行政全般の話聞く機会がありました。今も問題は山積しているようです。これは、多くの問題について当事者以外には知らされていなかったことに根本の原因があるように思います。広く知らせていくことにより、問題の共通認識を得ることが重要で、知らせるための知恵を出していくことを本会の目標・ミッションであることを改めて感じました。▶隔月刊のペースを守っていきたいと思います。(酒井彰)



ふくりゅう 通巻27号
主な目次:

2002バルトン忌のお知らせ	1
2002年度総会報告	2
「水と森と食の祭典」のご案内	3
[追悼] 広松伝氏の遺志を継ぐ!	4
シリーズ 東京のし尿処理の歴史(3)	

特定非営利活動法人
日本下水道文化研究会
〒162-0067 新宿区富久町6-5
NJS富久ビル別館3F

TEL & FAX 03-5363-1129
jade@jca.apc.org
aan63630@syd.odn.ne.jp

「ふくりゅう」では、原稿募集をしております。「水」について思うこと、身近な話題、会に対するご意見やご提案、どのようなことでも結構ですから事務局までお送りください。

ホームページもご覧ください。

<http://www.jca.apc.org/jade/index.htm>